

メタ倫理学におけるヒューム的精神 ——伊勢田氏と鵜殿氏のコメントに対する応答¹

萬屋博喜

本稿では、『メタ倫理学の最前線』所収の拙論（萬屋 2019）に対して寄せられた、伊勢田哲治氏と鵜殿憩氏からのコメントに応答する。ここでは特に、主観主義と非認知主義（1節）、錯誤説と投影説（2節）、賢明な主観主義（3節）の3点に絞って検討することにしたい。なお、伊勢田への応答は3節、鵜殿への応答は1～3節で述べる。

1、主観主義と非認知主義

鵜殿は、拙論第2節における主観主義の定式化に関して、次のような批判を提示している。第一に、メタ倫理学における主観主義は「個々の主体が善・悪、正・不正の独自の基準を持っている」（本誌、13頁）と主張する「相対主義的な主観主義」（本誌、13頁）として特徴づけられることが一般的であるにもかかわらず、拙論ではそのような仕方で主観主義が定式化されていない。第二に、主観主義と非認知主義という「2つの立場はいくつかの共通部分を持つが、相互の関連性は第2章〔＝拙論〕では詳細に説明されていない」（本誌、13頁、補足は引用者による）。第三に、「ヒュームを主観主義として解釈する場合には、真や偽という言葉の用法はヒューム自身の用法から乖離してしまわないように注意を払う必要がある」（本誌、14頁）。なぜなら、ヒュームが「人間の反応に依存的な主観的な真理」を真理として認めているということを示すには、より本格的な解釈上の議論が求められる」（本誌、14頁）からである。以下、順に見ていこう。

まず、第一の点については以下のように応答したい。鵜殿の指摘するように、初期のメ

¹ 本稿は、京都生命倫理研究会の合評会（2020年9月）にて発表した原稿を大幅に加筆・修正したものである。当日は、評者と共著者の間で有意義な議論が展開された一方で、時間の制約もあり十分に応答できなかった部分もあった。今回のような形で、改めて応答の機会を与我えただいたことを嬉しく思う。特に、執筆の場を与えてくださった浅野幸治氏と、企画の調整役を務めてくださった蝶名林亮氏、ならびに評者と共著者の皆様にはこの場を借りて感謝の意を表したい。

タ倫理学における主観主義は、典型的には相対主義的主観主義として特徴づけられることが多い²。少なくとも、拙論の定式化との異同については、冒頭で明確に述べておく必要があっただろう。

以上のことを認めた上で、ここでは私が拙論で相対主義的主観主義とは異なる仕方で主観主義を定式化した理由を述べたい。拙論での定式化を再掲しよう（萬屋、46頁）。

道徳的判断に関する主観主義

(S1) 道徳的判断は、真か偽のいずれかでありうる。

(S2) 道徳的判断を表す道徳的言明は、道徳的な事実や性質に対するわれわれの反応や態度を記述している。

このように定式化した理由は、初期のメタ倫理学における主観主義的なヒューム解釈が、基本的には相対主義的主観主義ではなく記述主義的主観主義 (descriptivist subjectivism) を想定していたという点を強調したかったからである³。S.ブラックバーンが強調するように、記述主義的主観主義は道徳的判断の機能を記述とみなす点で記述主義的であり、記述される対象が主体の心的反応や態度に関する事実だと考える点で主観主義的である (Blackburn, pp. 50-51)。例えば、「殺人は道徳的に悪い」という私の道徳的判断は、「殺人の否認」という私の心的態度に関する事実を記述する機能を持つことになる。

続いて、第二の点については以下のように応答する。まず、拙論第1節で対比した「主観主義」と「非認知主義」は、それぞれ記述主義的主観主義と情動主義を指している。そのため、両者の「相互の関連性」は次の2点にまとめられる。第一に、「主観主義」と「非認知主義」は、道徳的判断を表す道徳的言明の機能が記述 (description) であるか、それとも表出 (expression) であるかという点で異なる。第二に、主観主義と非認知主義は、

² ただし、倫理的主観主義と倫理的相対主義を独立した見解として紹介する文献もある。例えば、Rachels, Ch. 2 および Ch. 3 を見よ。

³ ただし、これは仮説の1つにすぎないことを断っておく。ヒューム解釈史に関する詳細な調査と仮説の検証は、今後の課題としたい。

いずれも道徳的判断が主体の反応や態度に依存するという反応依存性 (response-dependence) を認める点で共通する⁴。したがって、拙論第1節における「主観主義」と「非認知主義」は、道徳的言明の機能が記述か表出かという相違点を持ち、道徳的判断の反応依存性を認めるという共通点を持つと言える。

最後に、第三の点について応答しよう。たしかに、ヒューム自身の立場を相対主義的主観主義として解釈する場合は、真理に関する彼の用法から乖離することになる。しかし、記述主義的主観主義として解釈する場合には、そうした困難は生じないだろう。なぜなら、道徳的判断は主体の心的反応や心的態度についての事実を記述するものだとみなされるからである。例えば、『人間本性論』第2巻第3部第10節での「真理には二種類ある。それ自体で考察された限りでの観念の間の比率の発見に存するものか、あるいは、われわれの対象の観念と現実存在との合致 (the conformity of our ideas of objects to their real existence) に存するものかのどちらかである」(Hume 1739-40/1978, pp. 448-9; 邦訳 198頁)⁵という説明は、「われわれの対象の観念」が道徳的判断を指し、「現実存在」が心的態度や心的反応に関する事実を指すことになるだろう。以上のことから、主観主義を記述主義的に理解すれば、「真」や「偽」に関するヒュームの用語法と齟齬を来すことはないと思う。

2、錯誤説と投影説

鶴殿は、拙論で紹介した錯誤説解釈と投影説解釈について、次の批判を提示している。第一に、「オルソンの錯誤説解釈に対して情動主義的解釈の側からなされ得る批判」(本誌、18頁)は次のようなものである。「[「懐疑派」で]ヒュームは、人々が道徳的性質をそれが客観的に存在するかのよう¹に錯覚する状況を記述しているが、そのような錯覚が道徳的判断の本質的な特徴であるということまでは述べていない。……ここで注意すべきことは、そのようにして抱かれた道徳的判断についての信念はわれわれが行う通常の

⁴ 例えば、R.ブランドは主観主義の特徴づけに反応依存性を含めている (Brandt, p. 153)。

⁵ 『人間本性論』からの引用・参照については、セルビー・ビッグ・ニディッチ版と邦訳のページ番号を併記する。底本と邦訳の書誌情報については参考文献表を見よ。

道徳的判断と混同されてはならない、ということである。仮にこのように情動主義者が主張するとしたら、オルソンがどのような再反論を行うことができるかは興味深い」(本誌、18～19頁)。第二に、「投影主義解釈に対しても錯誤説解釈に対するのと同様に、われわれが道徳的性質の客観的実在についての信念を投影的な仕方でも形成するとしても、そのような投影を介した信念形成を我々が行う通常の道徳的判断の持つ本質的な特徴ではないとヒュームは考えていたのではないか、という情動主義の側からの批判が予想される」(本誌、19頁)。以下、順に検討していこう。

第一の点について、拙論ではオルソンの議論を十分な仕方でも紹介できていなかったことを率直に認めたい。その上で、オルソンの議論に即して以下のように応答する。

まず、オルソンによれば、われわれは記述的メタ倫理学 (descriptive metaethics) と改訂的メタ倫理学 (revisionary metaethics) を区別すべきである (Olson, p. 19)。前者は、日常の道徳的思考や判断がどのようなものであるかを説明する営みであり、後者は、錯誤を含む日常の道徳的思考や判断がいかに改訂されるかを提案する営みである。

以上の区別に従えば、ヒュームは記述的メタ倫理学者として錯誤説を採用しているが、改訂的メタ倫理学者としては錯誤説を採用していない (Olson, p. 20)。そして、記述的メタ倫理学者としてのヒュームは、日常の道徳的思考や判断が錯誤を含むことがあるという偶然的事実を記述しようとしているのであって、そうした思考や判断が錯誤を本質的に含んでいる、あるいは含むべきだと主張しているわけではない。こうした見解は、錯誤が日常の道徳的思考や判断にとって本質的な特徴であるとする J.マッキーの見解とは対照的である (Olson, pp. 34-5)。したがって、オルソンの解釈するヒュームは、日常の道徳的判断にとって錯誤が本質的であるという主張にコミットしていないと言える。

第二の点について、鵜殿は次のように論じている。

ヒューム因果論の投影主義的な解釈は、投影という心的過程が日常的な因果信念の形成において不要であるというヒュームの考えを掬い取れていない。／因果性についての投影主義的解釈に対する上記のような批判は、道徳的判断についての投影主義的解釈に対しても当てはまるものであり、ヒュームが投影的な心的過程を道徳的判断の形成にとって本質的なものと考えていないことは見落

とされてはならない。(本誌、20頁)

しかし、因果的判断に関するヒュームの議論が、その他の種類の判断についても同様のものであるかどうかについては議論の余地がある。なぜなら、『人間本性論』での議論に限ったとしても、ヒュームは因果的判断にとって錯誤や投影が不要だと考えている一方で、知覚的判断や同一性判断にとって錯誤や投影が必要だと考えているからである。

『人間本性論』第1巻第4部第2節の議論によれば、われわれは想像力によって、これまでに経験してきた ABCD、A・CD、・BCD、AB・D といった知覚系列を背景として、例えば ABC・の断絶した箇所「D」という出来事を補填できる。具体的には、〈配達人の開扉、ドアの開放、特定の音、配達人の現前〉という知覚系列について、われわれは「配達人の開扉」や「ドアの開放」を目撃せずとも、それらの出来事を補填して信じるだろう (Hume 1739-40/1978, pp. 195-7; 邦訳 227~228頁)。こうした働きを担うのは、H. H. プライスが「想像力の惰性 (the inertia of the imagination)」(Price, p. 54) と呼んだ傾向性、つまり、手持ちの証拠を超えて規則性を投影しようとする傾向性である。久米によれば、知覚的判断に基づく想像力の惰性は、外界存在に関する懐疑論を生じさせる要因になっている (久米、31~32頁)。なぜなら、想像力の惰性は「想像力の軽薄な性質」(Hume 1739-40/1978, p. 217; 邦訳 250頁) に基づく「ひどい錯覚」(Hume 1739-40/1978, p. 217; 邦訳 250頁) であるため、その働きの信頼性に対して「決して根本的に癒されることのない病」(Hume 1739-40/1978, p. 218; 邦訳 251頁) としての懐疑が向けられることになるからである。したがって、ヒュームが因果的判断には錯誤や投影が不要だと考えていたからといって、彼がその他の種類の判断、例えば知覚的判断についても類比的に考えていたとは言い切れない。

以上の議論は、投影に関して因果性と道徳性の類比を持ち出すブラックバーンの解釈に問題があることを示唆する。その限りで、ブラックバーンの解釈に対する鶴殿の批判は正鵠を射ていると言える。しかし、ヒュームがいかなる種類の判断にとっても投影は不要だと考えていたかどうかについては、議論の余地がある。例えば、『道徳原理研究』補遺での有名な一節を改めて引用しておこう。

前者〔理性 (reason)〕は真偽に関する知識を伝達する。後者〔趣味 (taste)〕は美醜や徳に関する感情を与える。一方〔理性〕はさまざまな対象を本来あるがままの姿で発見するのであり、何かを付け加えたり差し引いたりすることはない。他方〔趣味〕はある種の産出能力を持っており、内的感情から借りた染料を使って、あらゆる自然的対象に金メッキを施したり汚れた染みをつけたりする。言うなれば、新たな創造物をもたらすのである。(Hume 1751/1975, pp. 285-6; 筆者訳)⁶

ここで、ヒュームは美的判断や道徳的判断に関わる「趣味」が「新たな創造物 (a new creation)」をもたらすと述べている。もし「新たな創造物」が美的価値や道徳的価値を指すと解釈できれば、美的判断や道徳的判断において投影は対象に価値を付与するという重要な役割をもつとみなされていることになるだろう。

以上のことは、判断の種類が変化すれば投影の種類も変化するという論点を示唆している。この示唆が正しければ、ヒュームは因果的判断と道徳的判断に関して、それぞれ異なる種類の投影を想定していたと解釈することもできるだろう。つまり、ヒュームは因果的判断に関連する種類の投影が不要だと考えつつ、道徳的判断には因果的判断とは異なる種類の投影が必要だと考えていたかもしれないのである。

3、賢明な主観主義

鵜殿は、D.ウィギンズが提示した「賢明な主観主義」という立場に対して、できる限りヒュームのテキストに即した仕方でヒューム解釈としてもメタ倫理学の理論としても魅力的な立場であることを示そうと試みている。特に、「傾向性と反事実的な思考」と「会話・社交を通じた共感の拡張」という論点を『人間本性論』から改めて抽出した上で、賢明な主観主義を補完する鵜殿の議論は、ウィギンズの解釈に含まれる問題点を明るみに

⁶ 『道徳原理研究』からの引用・参照については、セルビー-ビッグ・ニディッチ版のページ番号を付す。底本の書誌情報については参考文献表を見よ。なお、引用文中の〔 〕は筆者による補足である。

するだけでなく、ヒュームとヒューム主義の距離を縮める1つの重要な試みとして評価に値するだろう(本誌、25～29頁)。

さて、ウィギンズは「賢明な主観主義?」において、「ヒュームの公式の理論」(Wiggins 1998, p. 194; 邦訳 247頁)と「賢明な主観主義」(Wiggins 1998, p. 207; 邦訳 268頁)を区別して論じている。ウィギンズにとって、前者は理想的観察者理論に近い見解であるのに対し、後者はその不備を補う洗練されたヒューム主義である⁷。こうした点をふまえると、鶴殿の試みは、ウィギンズの言う「ヒュームの公式の理論」と「賢明な主観主義」の距離を、丁寧なテキスト読解を通じて縮めようとした研究として位置づけられる。

以上の点に関して、拙論では『イングランド史』に着目した解釈の可能性を示したが、賢明な主観主義の補完という点では甚だ不十分な試みに終わってしまった。そのため、今後は鶴殿による建設的な提案をふまえつつ、どこまでヒュームとヒューム主義の距離を縮めることができるのかを検討する必要がある。

続いて、伊勢田のコメントに応答する。伊勢田は「『イングランド史』からヒュームのメタ倫理学上の立場を読み取るというのはおもしろいが、どのくらい妥当性があるのか。まったく別のタイプの文章を書いているときには思考の枠組み自体が入れ替わってしまうので、よほど意識的にやっていないかぎり整合性は期待できないものではないか」(本誌、4頁)と述べている。

これは、非常に重要な指摘である。というのも、ヒュームの文体は、執筆時期や主題に応じて変化しているからだ。例えば、『人間本性論』(1739-40)は論考(treatise)であり、『道徳・政治論集』(1742)はエッセイ(essay)であり、『自然宗教に関する対話』(1779、生前は未公刊)は対話(dialogue)である。ヒュームのテキストからメタ倫理

⁷ なお、ウィギンズは『倫理学』において、自然的徳・人為的徳に関するヒュームの見解を(メタ倫理学理論ではなく)道徳の系譜学の観点から解釈しようと試みている(Wiggins 2006, pp. 30-82)。また、メタ倫理学に関連したヒュームの見解についても、ウィギンズは「(ありうる)デイヴィッド・ヒューム」・「(実際の)デイヴィッド・ヒューム」・「洗練されたヒュームの主観主義」を区別した上で、ヒューム自身の見解と賢明な主観主義との距離を再確認している(Wiggins 2006, p. 371)。

学上の立場を読み取る際には、こうした文体の変化がヒュームの思想に対して与えた影響も考慮に入れる必要があると考える。このことは、別の機会に詳しく論じたい。

4、ヒュームの精神

最後に、ここまでの応答をふまえた上で、拙論が目指したことを確認しておきたい。メタ倫理学の歴史において、ヒューム主義はどのようにして生まれ、多様化していったのか。この問いに答えるために、拙論では、ヒューム主義が形骸化・細分化しつつある現代において、「ヒュームに帰れ」という標語のもとにヒュームの精神 (Humean mind) を取り戻そうと試みたのである⁸。拙論を執筆した段階ではこのことを十分に自覚できていなかったが、今後の研究ではヒュームの精神が継承されてきた歴史をできる限り正確に描きつつ、自らもヒュームの精神を引き継いで議論を展開したいと考えている⁹。

参考文献

- Blackburn, S. *Ruling Passions: A Theory of Practical Reasoning*. Oxford: Clarendon Press, 1998.
- Brandt, R. *Ethical Theory: The Problems of Normative and Critical Ethics*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice-Hall, 1959.
- Coventry, A. and Sager, A. *The Humean Mind*. New York: Routledge, 2019.
- Hume, D. 1739-40. *A Treatise of Human Nature*, edited by L. A. Selby-Bigge and P. H. Nidditch, second edition. Oxford: Clarendon Press, 1978. デイヴィッド・ヒューム、『人間本性論 第一巻 知性について』（木曾好能訳、法政大学出版局、1995年） デイヴィッド・ヒューム、『人間本性論 第二巻 情念について』（石川徹・中釜浩一・伊勢俊彦訳、法政大学出版局、2011年）。
- . 1751. *An Enquiry concerning the Principles of Morals*, edited by L. A. Selby-Bigge and P. H. Nidditch, third edition. Oxford: Oxford University Press, 1975.

⁸ 『ヒュームの精神 (The Humean Mind)』という論文集では、ヒュームの思想史的位置づけ、ヒューム解釈、ヒューム受容、ヒュームの遺産といったトピックについて、さまざまな観点からヒュームの精神に則った議論が展開されている (Coventry and Sager)。

⁹ 本研究は、文部科学省・科学研究費補助金 (若手研究) 「想像力」の概念を基軸とした物語的自我論の構築: ヒューム主義からのアプローチ (課題番号 20K12798) の研究成果の一環である。

- 伊勢田哲治、「『メタ倫理学の最前線』全体について」、本誌、3～10頁。
- 久米暁、「外界に関する非懐疑主義的自然主義」、関西学院大学人文学会『人文論究』第55巻第3号（2005年）、21～41頁。
- Olson, J. “Projectivism and Error in Hume’s Ethics.” *Hume Studies* 37, no. 1 (April 2011): 19-42.
- Price, H. H. *Hume’s Theory of the External World*. Oxford: Clarendon Press, 1940.
- Rachels, J. *The Elements of Moral Philosophy*. 8th edition, edited by S. Rachels. New York: McGraw-Hill Education, 2014.
- 鵜殿憩、「メタ倫理学におけるヒュームとヒューム主義」、本誌、11～31頁。
- Wiggins, D. 1998. “A Sensible Subjectivism?” In his *Needs, Values, Truth* 3rd edition (Oxford: Oxford University Press), pp. 185-214. デイヴィッド・ウィギンズ、「賢明な主観主義?」、『ニーズ・価値・真理 ウィギンズ倫理学論文集』（萬屋博喜訳、勁草書房、2014年）、233～286頁。
- . 2006. *Ethics: Twelve Lectures on the Philosophy of Morality*. Cambridge: Harvard University Press.
- 萬屋博喜、「ヒューム道徳哲学の二つの顔」、『メタ倫理学の最前線』（勁草書房、2019年）、45～68頁。